

宝物集諸本の系統

——二卷本系本文の位置をめぐって——

大 島 薫

一、はじめに

宝物集諸本^①の内、第二類二卷本系と、小泉弘氏が分類された系統の諸本は、他系統本に比べると平仮名書きを多用した本文で記されており、また、完本で伝わる宝物集の中で、分量的に最も少ないものである。ただし、この分量の少なさは、宝物集を構成する宝論・六道・浄土十二門といった基礎的な枠組のいずれかを欠くためではなく、その枠組の中に例証としてあげられる説話や和歌の少なさによっている。浄土十二門第六の一節には、明らかな誤脱も認められ、二卷本が何らかの宝物集テキストに基づいた省略本であることをかいまみせている。

せつりこしのさむけと云は正法をもつて国をおさめ六さい日物

の命をころさす父母にけうやうするを申也正法をもつて国をおさむると云はまつりことたゞしからねは天下乱る天下みたれぬれは万民のなげき也民のなげきすなはち罪業なりまつりことあしきは今世後世のたゞり也されはきのふんていは六さい日物の命をころし給はすむかし少沙弥の有けるかありのひとつ水になかれけるをとりいけたりし

観普賢菩薩行法経にあげられた刹利居士の五つの懺悔の内、三つを説く一節であるが、「されは」で続けた傍線を施した箇所は、「正法をもつて国をおさめ」た例証としてあるべきはずのところだが、「六さい日物の命をころさす」とする二番目の懺悔と結び付けられているのである。魏文帝は賢王として有名な人物でもあり、また、他系統本の内、第二種七卷本系では、正法治国を述べる例の一つと

して

魏文帝政^{コト}スナヲニシテ他^カ善^キナシトイヘトモ往生^シ素懐^{トケ}給ヘ
リ朕^ニ在^ル位^ニ政^{コト}何必^ニ正^ス理^ヲ上^ニ恥^ム聖^ニ衆^ニ下^ニ學^ム覺^ス慧^トコソノ給ケレ
と記していることから、二巻本編集時に、文意を無視した本文省略
が行われたと確認される。また、後で具体例を示して述べるが、他
系統本に比べると平易な本文をもって記されているのも、二巻本系
本文の特徴である。渥美かをる氏は、このような二巻本系本文の性
質をとらえられ

新しく寺院僧団が一般大衆むけ、特に女性をも含む庶民を対象
として、宝物集の新編纂を意図したに相違ない

と言及するとともに、

女人が対象になるという意識から、先述したように「十二門」
への導入部分に、法花經提婆品の童女成仏に源を発するよう
な、女人往生を強調する文が特に用意されたのだと思う

と述べられた。宝物集では、清涼寺という場において、「わかやか
なる女」の発問に対して「声少しなまりたる者の法師なめりと覚ゆ
る」者が六道・浄土十二門を語っているのを、筆者と覚しい人物
と、宝論を行った人々が聞いているというのが、どの系統にも共通
する展開である。そのため、渥美氏御指摘の「十二門」導入部に記
される二巻本に独自の記述も、「女人が対象となるという意識から」

加えられたとする考えとは別に、女人に対して語られているという
設定に一貫性を持たせるための配慮であったとも考えられる。六道
から浄土十二門へ話題の移る箇所において、二巻本系のみ、聞き手
である女人と語り手となる僧を再び登場させているが、これも同じ
意図によると考えられる。また、二巻本系では、浄土十二門が語り
終えられた後に、これ迄の語り手「声少しなまりたる者の法師なめ
りと覚ゆる」者の正体を、清涼寺の釈迦像の化身であったと明して
いる。宝物集がこの釈迦像に端を発することから推測するに、結末
部において呼応を図るように仕組んだと思われ、他系統本に比べる
と一つの物語として練り上げられているということが出来る。二巻
本系踏本には、「宝物集物語」と巻末に記したものもある（上野本
・北大本・細川文庫本）が、理由のないことではないと思われる。
さて、この二巻本系については、他系統本との本文関係を問われ
ることが少ないが、宝物集の諸本を考える上には、重要な系統であ
ることが指摘されている。武久堅氏は、延慶本平家物語に引用され
ている宝物集について

身延山久遠寺本系の祖本に当たるとであろう、と同時に、七巻本
の創出本であった可能性もまた濃厚である

と結論付けられた中で、

イフナラクナラクノ底ニヨチヌレハ刹利モ首陀モカワラサリケ

り

という有名な和歌の、傍線を施した箇所が二巻本とのみ一致する
とに言及されているのである。第二種七巻本系の「創出本」と二巻
本系本文がどのように関わっているのか、究明の必要を感じさせる
指摘であり、二巻本系本文を宝物集諸本の中でどう位置付けるか
が、宝物集の形成過程を探る上で有効だと思わせる。また、今野達
氏も、統教訓抄に引用された宝物集について述べられた中で、現存
諸本の内では身延山久遠寺本の本文に近い宝物集が用いられなが
ら、二巻本系に独自の記述も記されていることにもふれておられる。^⑧

以下、二巻本系より後出とみられる平仮名古活字三巻本系・平仮
名整版三巻本系・第一種七巻本系(元禄本)^⑨を除いて、一巻本系・
片仮名古活字三巻本(以下、片活本と略す)系・第二種七巻本系と
の本文比較を行い、宝物集諸本に占める二巻本系の位置について考
えてみたいと思う。

二、第二種七巻本系・片活本系・一巻本系と

二巻本系本文

まず、畜生道を説く一節を、二巻本から引いてみる。

いぬになりぬれはをくのしゆみのことくかはねのつもるまで犬
となり鳥となりぬれは過去八万こうさきなを八万こうみらい八

万こうのすゑ又八万こう鳥となるゆへにしやうをたくはふると
かきてちくしやうとよむ也^⑩

この箇所は、第二種七巻本系に(身延山久遠寺本より引用)

白犬ナリタリシカハカハネ徳須弥、如、積占婆城鳩生シカハ 四八
万劫鳩姿アラタメサリキ故畜生云文字、生ヲタクハフトソヨミ侍
ナル

とある以外、一巻本・片活本には記されていない。また、第二種七
巻本系の記述を砕いて述べる傍線^⑪も、第二種七巻本系の場合は、
右の一節に加えて記している「白犬」と「占婆城鳩」について説く、
いわば注というべき本文の中で

過去八万劫、サキ八万劫鳩ナリキ未来八万劫、後又八万劫鳩ナルハ
シ

(身延山久遠寺本より引用)

と、「四八万劫」に対する同じ理解が示されており、両系統の本文
の関わりの深さを知ることができる。二巻本では傍線^⑫のほかにも、
「白犬」を「いぬ」と、「占婆城鳩」を単に「鳥」(傍線^⑬も
同様)と記しており、文意のとりやすい本文をもって記された宝物
集であることがわかる。二巻本系より派生した後出の系統を除け

ば、第二種七卷本系と二卷本系以外に記されていない記述は、特に浄土十二門第六以降に多くみられ、また、怨憎会苦を説くための周防内侍の詠んだ一首のほか、和歌の引用の場合にもそのことが認められる。

また逆に、二卷本系には、第二種七卷本系に欠け、片活本・一巻本で記される一節が、記されている場合もある。

諸行無常を觀するを仏法の大窟とは申とこそうけたまはり候へ大聖世尊四十余年の間おほくのほうを説給へるにもみなしよきやうむしやうなり

(破線を「大意」とする二卷本系諸本もある)

第二種七卷本系でなく、片活本・一巻本が二卷本系と関わる一例である。

片活本と二卷本系についてみると、たとえば次の箇所がある。

法花經にも一百八十劫空過無有仏三惡道增長阿修羅亦盛此經の心は一百三十こうむなしく過てのちはほとけのまします事なし惡道いよくそうちやうして阿修羅といふけたうさかり成へしとなり

二卷本より引いたが、傍線を施した箇所は、第二種七卷本系・一巻本に記されず、片活本で記されるため、片活本系もまた、二卷本系と関わりを持つ系統といえるのである。この箇所の經文引用は、法

華經の化城喻品に記される偈に拠るが、法華經では二卷本のように四句を連ねては記さないため、出典参照の上でも容易には同文を成し得ず、二卷本と片活本の一致が偶然生じたのではないことを裏付ける。また、二卷本系あるいはその後出系統以外に記されない「此經の心は」以下の読み下しからは、先の畜生道の一節同様、平易な記述方式を用いる二卷本系本文の特質を知ることができる。

一巻本系と二卷本系の関わりは、たとえば、第二種七卷本系や片活本では子宝を説く箇所記されたために八苦の項で省略した老苦について、一巻本系と二卷本系にあつては子宝と八苦と、重複して述べている例もあるが、ここでは、浄土十二門第一の冒頭について具体的に見ておこう。

二卷本

道心をおこして出家とんせ
いして仏に成へしと申は是
たしかの修行なり万法は心
のなすところにてさらにへ
ちの法なしほつしんを起し
て浄土をもとむへき也ま
くわん法師は人木石にあら
すこのめはをのつから発心
すとそをしへける……心は

一巻本

道心、発シテ出家入道スルタシカノ
往生道、万法心ホカニサラニ別之
法ナシ。コ、ロヲ、コシテ道、求ヘ
シ。……万事夢、コトシ。ハヤクコ
ノオモヒヲナシテ、道心、発ヘシ。
煩惱家之犬、ウチサルコトナシ。
菩提山カセキ、ツナゲトモト、マ

第一のあたり心に心をゆるすへからす煩惱は家のいぬうて共門をさらす心は山のかせきなつけどもしたかはず心はあらかむまのことししつめて道心をおこすへし一念ばたいしんをおこせは百千万の塔をつくるにはすくれたりと申ぬれは一念の功德さへむりやう也いはんやなく道心を……

これに対して片活本は次のように記している。(第二種七卷本系もほぼ同文)

道心ヲ起シ出家シテ仏道ヲ可求ト申ハ徒ノ往生ノ業因也大海ハ涸露ヨリ起リ須弥ハ微塵ヨリハシマル無上ノ位ニ登ン事又一念ノ力ニヨルヘシ道心トハ菩提心ナリ菩提心トハ大悲ナリ千手陀

リカタシ。コ、ロハ野馬、コトシ、シツメテ道心、発ヘシ。猿猴、コトシ、ナツケテ仏道、モトムヘシ。コ、ロニハ第一、アタナリ、コ、ロニコ、ロヲユルスコトナカレ。禪林寺之永観、ヒト木石、アラス、コノメハヲツカラ発心トソヲシヘテ侍メル。コノムテモ、コノコスヘキハ道心也。無始生死ヨリコノカタ、諸仏之出世、利益モレテ、空、六道輪廻スルコトハ、一度、コノ道心、ヲコシテ出家入道セサリシユヘナリ。一念発起菩提心、勝於造立百千塔、申侍メレハ、道心、オコシタラム功德、ハカリナク侍ヘシ。

羅尼經ニ大悲心是ト云ハ則是ナリ万法ハ心作ニシテ心ノ外ニ別ノ法ナシ心仏及衆生是三無差別ノ故ニ心ハ第一ノ怨ナリ心ニ心ヲ許ス事ナカレハ野鳥ノ如シ静メテ道心ヲ起セ神ヒハ彌猴ニ似タリ名ケテ仏道ヲ求ヨ煩惱ハ家ノ大打トモ不去菩提ハ山ノカセキツナケ共不溜ラ猶金山ヲスリ風求羅ヲマスカ如ク好テ道心ヲ起スヘキ也爰以南都東大寺禪林寺永観律師ト云人非木石ニ好ハ自ラ発心ストソ侍メル早ク道心ヲ起テ速ニ名利ヲ可離ナリ一念ノ菩提心ヲ起ハ百千ノ塔ヲ造ニモ勝タリ況ヤ永ク道心……

二卷本と一巻本は、片活本・第二種七卷本系に記された傍線④をもとに記さず、逆に、片活本・第二種七卷本系に欠ける傍線⑤を共有する。傍線⑥を「家の犬」「山のかせき」「あらかむま(野馬)」の順に記している点も、両系統は一致する。それぞれの箇所での書き様の違いはあろうが、一巻本系も他の二系統同様、二巻本系本文と関わる本文をもって記されているということが出来る。ただし、一巻本の傍線⑥は「野馬」に続いて「猿猴」も記しており、二巻本だけでなく第二種七卷本系や片活本とも一致するところから、二巻本系と一巻本系は、たとえば、二巻本系本文に基づいて一巻本系が編集されるといった単純な関係にあるのではないことが予想される。一巻本の場合、完本として伝わっていない事情を除いても、分量的には二巻本系よりさらに少なく、何系統かの宝物集本文が取り

合わせられているとは考え難い。

では二巻本系が、一巻本系、そして片活本系、第二種七巻本系の本文の取り合わせ本として成立したのだろうか。しかし、たとえば普安王説話に「かすみにうそふき花にたはふる」と二巻本に記される一節で、霞・花と並べるのは片活本だけであり、「花にたはふる」と記するのは第二種七巻本系だけである。たつたこれだけの一節で、片活本と第二種七巻本系の本文を取り合わせたと考えられないため、二巻本を編集するにあたって、すでに、片活本と第二種七巻本系の混同ともいふべき本文はあつたと思われる。二巻本系の場合、本文理解を助けるために差しかえたというのならばともかく、何系統かの本文を細部に互つて切り継ぎながら、他系統本より分量的に少ない本文を編集したとは考えられない。

また、二巻本系本文に基づいて、片活本系や第二種七巻本系の本文が編集されたとも考え難い。「命の覚束なきこと」を述べる中に記される一節を、まず、二巻本より引いてみる。

たうのたひしひんかく白楽天は人むまれて百年をたもつといへ共日の数をかそふれば三万六千日也其百年をたもつ物は百人の中に一人もかたし老少不定のさかひなれはいのちつきていつれの野へいつれの山のふもとにかすてられて五たい所々にさんさひしてつちあくたとならんすらん誠に今生の身のはていかにも

なけくへき事なし

この同じ箇所を、第二種七巻本系では次のように記している。

太子賓客白楽天人生^レ二百年カソフレハ三万日其百年^{四十余}タモツ者

百一モナクトナケキ首楞嚴院明賢阿闍梨^{八十算}保人連日カソフレハ僅二万八十余日況中ハ過ナム者何待トカセン何日何時出入イキ再会待事ナク永隔何野間何山麓ステラレテ身分処々散在泥塊マシハラントスラントハ申カシ誠今生身ハテ命ヲハリイカ、ヲホツカナカラスモ侍ラン

(身延山久遠寺本より引用。同系吉田本・瑞光寺本、そして片活本も若干異同を生ずるがほぼ同文。一巻本はこの箇所を記さない)

二巻本の場合、傍線①を記した後に、第二種七巻本系や片活本に記されている傍線②を記さず、「老少不定のさかひなれは」と続けられているのである。傍線③の一節は、白氏文集の巻第十一「対酒」に人生一百歳 通計三万日 何況百歳人 人間百無一とあり、また、この「対酒」の一節は出典を注記した上で玉函秘抄に抄出されるほか、澄庵の雑念集にも「老苦事」の中で

此南閩浮提当世之人寿以百歳為極文集云人生一百歳通計三万日何況百歳人十无二三 百人無一人 十三三不可思

と記されており、白楽天の作として盛んに用いられていたことが窺える。が、一方、「老少不定のさかひなれば」以下の記述に関しては、第二種七巻本系や片活本に傍線②が記されているように、明賢の作、誓願講式の第三に

設有持^{ヒトキコト}八十算^ノ者^ヲ、連持^ノ日算^ノ機^ヲ、二万八千八百七十余日也。況過^{トシテ}年^ノ半^ヲ、二者^ノ殘^レ命^ハ無^ク幾^シ。……哀哉^ト、何^レ日^ノ何^レ時^ノ於^テ出^ル入^ル息^ハ無^ク待^テ再^レ會^ス永^レ隔^ス哉。何^レ野^ノ間^ノ山^ノ麓^ニ、被^レ奇^ニ身^ハ分^レ處^ニ々^々散^ラ在^ス、交^フ泥^ニ塊^ニ、^シ爲^ス塵^ニ。

とある一節が引用されていることは、すでに、山田昭全氏の指摘されたところである。第二種七巻本系や片活本のように、傍線②を記して当然の箇所なのである。しかし、簡略化とともに本文の平易化も行われている二巻本の記述は、第二種七巻本系や片活本に比べて誓願講式に遠いため、出典を注記しない二巻本から典拠を探ることの難しさが窺われる。つまり、二巻本の記述に基づいて、後に、誓願講式を再確認した上で本文の改変を行い、傍線②の後に出典注記をも加えたのが、第二種七巻本系あるいは片活本の記述であると考えられないのである。

二巻本系は、一巻本系・片活本系・第二種七巻本系のそれぞれと関わる本文をもって記されている。しかし、それらの三系統が、二巻本系本文に基づいて編集された後出の系統としてあるのではない

く、また逆に、それら三系統を適宜参照して、二巻本系の本文が編集されたわけでもない。二巻本に先行し、本文編集の土台として用いられた宝物集テキスト、つまり、二巻本系本文の母体と呼ぶべき宝物集テキストが存在し、そのテキストの段階で、一巻本系・片活本系・第二種七巻本系のそれぞれと関わる本文をもって記されていたものと考える。

三、二巻本系本文の母体

一巻本系・片活本系・第二種七巻本系のそれぞれと関わる宝物集テキストというと、身延山久遠寺本がある。小泉弘氏は、身延山久遠寺本を第二種七巻本系と分類する一方、「身延山本と片活三巻本との兄弟関係」と述べられた瓜生等勝氏の指摘をうけて

一巻本独自の記事が『宝物集』諸本中久遠寺本にだけ存在し、一巻本と久遠寺本との密接関係を示す一面を指摘することができ。久遠寺本が第二種七巻本系の伝本であることの動かないことは前にも述べたが、細部に互って同系本と比較してみると、これらと一致しない点や、寧ろ第一種七巻本や片仮名古活字三巻本に近接している点なども多く存在している

とも説かれている^⑩。身延山久遠寺本は、浄土十二門第十一の中で二巻本に記されている

一聞法花經決定菩提と云へり能たもちをこなひて往生の願をと
け給ふへし

という部分の傍線の箇所を唯一記すテキストではある。また、求不
得苦を説く冒頭でも

くふとつくはよろつ物の物をもとむるにえず心になふ事なしち
ゝたる春の日けふりたえてくひ物のたくひもとむるにえずれい
ゝたる冬の夜衣をうる事なくしてかんでんをあひする事なし
いしよくの二じにともしきものはかならずよつこのそみ心に
かなはずされはうつくしかりける子をすてたるにきる物にゆひ
つけたりける

身にまさる物なかりけりみとり子はやるかたもなく悲しけれ
とも

五月のなか雨のころかゝみをうりける女のうらにかきつけたる
哥

けふのみと見るに涙のますかゝみなれにし影を人にかたるな
△声刈説話へ続く▽

と記す二巻本に対して、次のように記している。

求不得苦者万事不求得一心協事無也都是貧苦ナムト申へキ也一
切苦中此苦尤難忍愛以毘沙門天王死苦相貧苦アワシトソ言
也遅々春日ケフリタヘテ食求トモ得事ナク漫々タル冬夜衣ウ

スクシテ寒天アカシカタシ衣食二事トモシキ者必一切心協事ナ
シ民食モテ天イカ、苦患アラサラムヤ

○身ニマサル者ナカリケリミトリコハヤラムカタナクカナシケ

レトモ

○是貧苦セメラレテウツクシキ子ヲステタリケルヲシカ、ミニカ

ケル哥也

○今日ノミト見心マスカ、ミナレニシカケヲ人カタタルナ

○是五月長雨比貧苦セメラレテ鏡売ケル人ウチニカキタル哥也細

ニハ俊頼朝臣髓惱イヘリ

△声刈説話へ続く▽

(○はわたくしに付す)

身延山久遠寺本に施した破線の箇所を省略すれば、二巻本の本文
は、ほぼ成るものと思われる。ところが、同じ第二種七巻本系諸本
の内でも本能寺本・吉田本・瑞光寺本(この三本は同文)は、傍線
○を欠くほか、和歌を並べる順も異なるのである。本能寺本によ
り、本文を引いておく。

求不得苦といふはよろつの事をもとめえずこゝろになふ事
なき也すへてこれを貧窮と申へき也一切の苦の中に此苦尤しの
ひかたしこゝをもて毗沙門天王は死苦にはあふとも貧苦にはあ

はしとはの給ふ也運たる春の日食をもとむるにえかたくまん
くたる秋の夜衣うすくて寒天明しかたし衣食の二事にともし
き物はかならず一切心になふ事なし民は食をもて天とすいか
苦患にあらさらんや

五月の長雨の比三河入道寂照かいた男にて侍りける比鏡をう
りけるうらにかきたりける

回けふのみと見るに涙のます鏡なれにしかけを人にいたるな

△芦刈説話▽

おこなひしける人のまつしきかありけり西也ける人の物おとら
せければよみ侍りけり

おこなひをつとめて物のほしければ西をそたのむくるゝかた
とて

〔因身にまさる物也けりみとり子はやらんかたかなしければ
二巻本・身延山久遠寺本には欠ける二重傍線を施した一首が記され
ており、また、〔因の作歌事情にしても、微妙に異なっていることが
わかる。同じ第二種七巻本系に分類されているが、本能寺本・吉
田本・瑞光寺本は、本文の一部を省略しただけでは二巻本の本文と
なるものでなく、第二種七巻本系諸本の内でも、二巻本系と関わる
のは、身延山久遠寺本であると確認できるのである。また、この一
節にもみられるが、吉田本等で記される箇所を、二巻本とともに身

延山久遠寺本も欠く場合がある。浄土十二門第六の一節をあげてみ
る。

二巻本

親のためにけうやうせさら
ん人あらむや然といへ共天
人はたのしみにふけりてけ
うやうの心さしなくして三
途のくるしみにせめらるゝ
也されは仏は御母をけうや
うのためにたう利天にのほ
り報恩経を説給ひし也

身延山久遠寺本

ヤノ為孝養報恩セム人イカ、餓
悔ナラサラム雖然天人楽フケリ
テ孝養心ナシ三途苦セメラレテ父
母事不知只人界生ウケタルタヒ
父母孝養至第一懺悔スヘキ也
サレハ仏浄飯王宮出給時心ツヨク
流転三界中恩愛不能断言シカト
モ正覚成後登一切利天ニ為广耶夫
人先報恩経説給

吉田本

親のために、孝養報恩せん人、いかゞさんげとならずも侍ら
ん。しかりといへども、天人はたのしみにふけりて孝養こゝろ
ざし無。三途の苦にせめられては、父母に孝養をしらず、たゞ人
界に生をうけるたび、父母に孝養して、第一のさんげとなした
まふべきなり。人界に生をうくる事は、よく有がたき事也。仏、
たとへをとりておほせられたるは、大海のそこに針を一をき
て、梵天より糸をくだしてつらぬかながごとし、と侍るめれば、

多生願劫にもかなひがたくぞ聞へ侍るゆり。心有る人、たれか父母に孝養せぬは侍る。ほとけは淨飯王宮を出給ひしときは、心つよく、流転三界中、恩愛不能斷、とのたまひしかども、正覺なりたまひての後は、まづ切利天にのぼりて、報恩経をときたまひき

二巻本の本文は、身延山久遠寺本に比べても随分簡略に記されているが、吉田本に施した傍線の箇所は、身延山久遠寺本でも欠けている。現在、抜書本としてある身延山久遠寺本の本文的位置付けとしては、吉田本等と同じ第二種七巻本系諸本の一つと考えられているため、日意による本文省略がどの範囲で行われているかを吉田本との校合をもつて検討されることが多い。そのためこの箇所も、日意が書写に際して省略した記述であつて、二巻本編集において略された記述がたまたま一致したと思われがちなのである。けれども、もう一つ、二巻本・身延山久遠寺本と同様に、吉田本等に記されている傍線の箇所を欠くものがある。藤井隆氏紹介の古筆切である。

をやのためにたれかけふやうのころなからん天人はらくにふけりてけふやうのころなし三途はくにせめられてをやのことをしらすたゝ人けんかいにしやうをうけるたひちゝはゝのをんをばうすへきなりされはほとけは淨飯王宮をいて給ときはころつよく流転三界中

破線を施した箇所を記す点、二巻本より身延山久遠寺本の本文に近いが、といつて身延山久遠寺本を写したのものでもない。吉田本で記されている傍線の箇所を欠いたテキストの存在を裏付けるとともに、二巻本系本文の母体となったテキスト、あるいは身延山久遠寺本の親本でも、この箇所が欠けていたと考えてよいことにならう。

そして、二巻本系本文の母体となったテキストと身延山久遠寺本の親本は、吉田本と同量の記述をもつて本文としたものではなかつたと考えられよう。身延山久遠寺本は、第二種七巻本系として同系に分類された吉田本等と異なり、二巻本系本文の母体と深い関わりを持つことは確かである。しかし、先にあげた浄土十二門第一の冒頭では、二巻本との関わりは一卷本にみられ、身延山久遠寺本は一卷本に比べると関わりの薄い、片活本と本文を記している。二巻本系本文の母体として身延山久遠寺本があるわけではないのである。けれども、身延山久遠寺本を第二種七巻本系諸本の一つとして吉田本等と同系に扱うことは別に、二巻本系本文の母体となったテキストを辿り得る本文を持つものとして考えることは可能である。浄土十二門第一を述べる冒頭に、日意の行ったであろう任意の省略や本文改変は認められないため、抜き書きの行われる前段階、つまり、その親本であつても、事情は同じであると思われる。

また、いくつかの系統の本文と関わるテキストといえ、身延文

庫藏の零本（以下、身延本と略す）もある。黒田彰氏により

身延本は、小泉氏の分類にいう第五類片仮名古活字三卷本系と関わる一方、また、第七類第二種七卷本系とも関わっている。

本書は、系統を異にする片活本と七卷本とを恰も折衷したような本文形態を有しており、小泉氏の分類によるいずれの系統にも属さない。強いて言えば、身延本は、片活本と七卷本との丁度中間に位置する

と位置付けられたテキストである。中巻しか伝えられておらず全容は不明だが、浄土十二門第一の冒頭を片活本・身延山久遠寺本と同一文で記しているほか、二巻本に

又文殊は願我命終時尽除諸障導面見阿弥陀往生安樂國と云り是もまへとおなし心也

と記されている一節を欠くなど、少なくとも二巻本系本文の母体として用いられたテキストではない。ところが、身延本にも、吉田本等には記されるものの、二巻本と共通した記述を欠く箇所がある。

まして地ごくの中なりとも、いかゞあばうらせつといふとも、かたさりたてまつらざらんや。罽目國に広州の法興といふものあり。一期の運命つきてて、あんな王宮にめされぬ。大なる車にくろがねの札をつみて、冥官の前に引出けり。法興が在生のつみのしるせる一枚のふだのはしに、聴聞といふ文字ある札、

猛火となりて、そこばくの罪業をしるせる札をやきうしなふ。

しりぬ、法を聞ものゝ悪趣をまぬかるといふことを。僧と申は

……

浄土十二門第二の一節を吉田本から引いたが、二巻本と身延本は、傍線を施した分だけ欠くのである。傍線の箇所が第二種七卷本系独自の記述であることは指摘されているが、二巻本を編集する際、母体としたテキストから省略された箇所と、身延本に欠ける箇所と、偶然に一致したとは思えない。同様の例としては、浄土十二門第一に述べられた怖魔のこと等もある。身延本に欠ける記述と二巻本に欠けた記述がたまたま一致したのではなく、二巻本系本文の母体とされたテキストの段階でも身延本と同じく、記されていないかたかと考える。それゆえ、身延本も、二巻本系本文の母体そのものではないが、それを辿る上に必要な本文ではある。

二巻本系本文の母体として用いられたテキストは、吉田本等に比べて分量の少ないものであったらしい。それは、身延山久遠寺本・身延本との校合から辿り得ることである。しかし、他本との校合の結果、二巻本系に独自といえる記述であっても、二巻本編集時に母体としたテキストの本文を、改変した箇所とはかりは言いきれない。次に、浄土十二門第六を説く冒頭の一節をあげてみる。

業障をさき付けして仏に成へしと申は人界に生をうくるたのしみ
懺悔のほうにあひしゆへ也道輝禪師のあんらくしうに經をひき
てのたまはく人の一日一夜をふる間には八万四千の思ありいは
んやねんく⑤に起す所の思のかす無量無辺也是皆三途のこう也
と云りいはんや一生かひの業をや生々世々の業をや此心をは永
観法師か七だんのしきにくわしくしるせり

片活本

業障ヲ懺悔シテ仏ニ成ト申
⑦ 八人界ニ生ヲウケタル本意
懺悔ノ法ニ有カ故也

身延山久遠寺本

業障、懺、仏道求ヘシト申永観、七段
⑧ 往生講式、書ケリ人一日一夜内八
億四千万思念々皆三途業因也云リ

傍線⑥は片活本に、傍線⑦は身延山久遠寺本に、それぞれ記され
ているが、二重傍線を施した箇所は二巻本に独自の記述である。と
ころが、出典注記にあがる永観作の往生講式には

第二懺悔業障者。前発苦菩提心。次懺悔業障。夫人之在、世誰
畏罪業。不知後世恣作衆罪。尤恩也。安樂集引經云。人
經一日一夜有八億四千万念。一念起、惡得一生惡身。十念
發、惡受十生惡身。乃至千万億念復爾。如是一日惡念之報

受尽尚難。況一生之間惡業乎。何況無始已來惡業乎。

とあり、二巻本に独自の記述も記されているのである。また、出典
注記を持たない片活本の記述も往生講式に拠ると考えられることか
ら、往生講式の「懺悔業障」冒頭を本文化したのが二巻本であり、
身延山久遠寺本とは異なる位置に傍線⑥を記す有効性を知ること
もできる。けれども、二巻本系本文の母体が身延山久遠寺本のような
本文を記していて、注記された出典を参照した上で増補や改変が行
われたとは考えられない。出典を重視するための本文改変が行われ
たのならば、二巻本でも破線の箇所を「八億四千万」と記してい
はずだからである。二巻本系の母体となったテキストに記されてい
た本文を、二巻本の段階でも継承したのであり、一方、片活本や身
延山久遠寺本は、このように往生講式を本文化した記述から枝分
れたものと思われる。つまり、二巻本系本文の母体となったテキ
ストは、片活本系や身延山久遠寺本を溯る本文をも有していたので
あり、省略本ながら二巻本系は、部分的にはあっても古い宝物集
テキストを伝えることになる。従って、二巻本系に独自の記述であ
っても、宝物集本文を考える折には、注意を払う必要がある。
また、それを裏付ける資料として、藤井隆氏紹介の伝九条教家筆四
半切がある。

しりて我も人を指と云ともたな心をさすかことくなる事なしと

いひ又父をくして道を行に木の中にやすむ程にあふといふむし父のひたいにくるつきたりおほきなるはうをもてあふをうちけるにをやをもちころしてけり父をころすと思ふ心なれとも逆罪をおかすは愚痴の病の故也四百四種の病は一生のあひたの病なり貪瞋痴の三毒

藤井氏解題によると、鎌倉中期を下らず初期に近い頃の書写らしい。病苦の内で貪瞋痴の痴を説く一節である。

二巻本

むかし一人の愚人あり父をつれて道を行に木のかげにやすむに蚊といふ虫ちゝのひたにくひつきたりけるをおほきなるはうにてかほをちける程に親ともにうちころしけりおやをころさんとはおもはさりけれ共くちなるによりてぎやくざひをおこしけり四百四病はたしやうの間のやまひとんちんちの三とくのやまひは生々世々のやまひ也

身延山久遠寺本

昔一人愚人アリ五通相人々サウスル事掌サスカ如愚人仙人徳眼クシリテ取云ヘトモ愚人眼モツ故人相掌指事無愚痴如此得意也一又父具道行爲息樹ノ本ス、ムニアフ云虫父額クキツキタリ愚人棒云物モチアフ打程父打殺父殺思トモ愚痴故逆罪ヲカス三途墮在 多生劫 閻苦思受 三毒病 故也 是 二

(第二種七巻本系でも吉田本等は傍線㊦を「じりてとるといへども愚人ひとを相するに、たなごころをさすがごとし」と記しており、本文に矛盾を生ずる)

傍線㊦は五通仙人譚の一部で、現存諸本中第二種七巻本系以外に記されず、以下の父を打殺した愚人譚は二巻本にも記される。が逆に、傍線㊧は二巻本とその後出の系統以外に記されない。細かい箇所でも、傍線㊦は第二種七巻本系と一致し、傍線㊧は二巻本と一致する。二巻本系と第二種七巻本系を合わせ持ったテキストの切といえる。しかし、両系統の本文と全く一致するものでもなく、また傍線㊦のような細かい箇所での出入も生ずることから、任意に両系統の本文が取り合わせられたテキストであるとも考えられない。二巻本系に独自の記述であっても、編集時の本文改変により生じたばかりではないことを示す資料である。そしてこの古筆切は、二巻本系本文の母体となったテキストを唯一伝える資料でもある。わずかに八行を残すのみだが、たまたま伝えられたこの切の持つ意味は大きい。

今井正之助氏は、宝物集から引用が行われた統教訓抄・平家庶伝抄と今日伝わる宝物集の諸系統本とを再検討され

一巻本、二巻本、片活本との関わりがありようが、ひとまず身延山本系とくくった本文の中でもそれぞれ特徴を示し、平家族伝抄は一巻本と、統教訓鈔は二巻本と、身延山本は片活本と、より密接な関わりをもつことに注意したい

と述べるとともに

統教訓鈔依拠宝物集の系統から二巻本が、身延山本系統（吉田本系）に対する呼称ではなく、狭義の身延山本周辺本文系統）から片活本が、それぞれ派生した

と説かれた。④ たしかに、統教訓鈔に引用された宝物集は、二巻本系本文の母体を考えるために必要となる性質を有している。しかし、今井氏の場合、二巻本の派生をこの宝物集の系統からと限定されるのは、成尋阿闍梨譚、つまり二巻本以外に記されない記述を統教訓鈔が引くことによる。統教訓鈔に引用された宝物集も、二巻本系本文の母体を辿り得る本文を持ったテキストの一例として考えておきたい。

四、むすび——宝物集諸本の系統試論——

以上、二巻本系の本文を、現存する宝物集諸本に位置付けるとともに、この系統の本文を編集するに際して用いられた、二巻本系の母体というべきテキストを探ってみた。二巻本系は、後出の系統を

除いた諸系統本とそれぞれに関わる本文をもって記されているが、その取り合わせ本として編集されたものではない。小泉氏は、他系統に互って関わる身延山久遠寺本について「誠に特異な本文を持つ伝本」と述べられた。しかし、二巻本系本文の母体として用いられるテキストも、他系統に互って関わる本文を有したことになる。はじめにあげた、武久氏御指摘の統教訓鈔に引用された宝物集、そして、今野氏御指摘の統教訓鈔に引用された宝物集ほか、小泉氏の系統論提示以後に紹介された身延本や古筆切も、その分類の枠を越えた本文をもって記されているのである。小泉氏の種類から考えれば、他系統に互って関わりとしか位置付けられない本文は、意外に特異な本文でもないことが理解できよう。⑤ 身延山久遠寺本についても、第二種七巻本系諸本の一つとして吉田本等と同系には扱いきれないのである。前章においては、二巻本系本文の母体となったテキストを辿るために身延山久遠寺本の本文を用いたが、逆をいえば、身延山久遠寺本の親本の復元に、吉田本や瑞光寺本等の第二種七巻本系諸本だけが用いられるべきではないことにもなる。

鉄針テツチクチ人盗クチニヒトヨハル表目ウラメ餓死ウツシ不フ盗人受ヒツコト栗クリ功給コト寒斃サムシ
レハコトモ不フ詩シ考得コト一ヒト賢人主与サトウジノミヤト得トクマシキ者モノ物得モノトクヌナリ

浄土十二門第三の一節を身延山久遠寺本から引いたが、この同じ箇所を吉田本では次のように記している。（瑞光寺本も同文）

くろがねは針にてはて、人はぬすみにてをはる、盜は是、生々世々をふれども、そのとがまぬかるゝ事なし。一つ証を申べし。
〔三十二人のかいごの武士譚〕

表目餓死 不受盜父之粟 公給寒斃 不得詩芳之妻
かしこきものは、かく主のあたふるをそら、えまじき物のものをばえぬ事にてぞ侍るめる

身延山久遠寺本では、この傍線を施した箇所を欠いているのであ
るところがこの一節は、二巻本と身延本に

二巻本

くろがねは針にてはて人は
ぬすみにてはつる也今生後
生あさましき事也されはか
しこき人は人のあたふる物
をさへことによりてとらす

身延本

鉄ハ針ニテハテ、人盜テハツ。表
目、餓死セシカトモ、盜父カ粟ヲ
ウケス。公給、寒斃、セシカト
モ、詩芳妻、エス。賢者、与ル
物ヲモ、得ヌ事ニテソ侍ル。

とあるほか、片活本そして一巻本でも同様、吉田本に傍線を施した箇所は欠いているのである。身延山久遠寺本の親本には吉田本と同じく傍線を施した箇所も記されていたが、日意が書写を行う際に省略した、と考へるべき積極的根拠もなく、むしろ、二巻本系の本文と関わり、かつその母体となったテキストを辿る諸本と等しく、身延山久遠寺本の親本にも欠けていたと考へる方が自然であろう。た

しかに、身延山久遠寺本の親本は、二巻本系の母体となったテキストに比べれば分量の多いものであったろうが、吉田本等と同量の記述により記されていたものでもないらしく、二巻本系の母体となったテキストとは同系統に位置付けられるべき本文であろうことが考へられるのである。分化の諸相は様々だろうが、二巻本系の本文と関わり、また、その母体となったテキストを辿り得た諸本を一系と考へるとともに、そう考へた上で校訂作業を行うことが、ある意味では宝物集の祖形としての本文を知る上に必要なかもしれない。

ただし、そう考へる場合に別系として扱う吉田本・瑞光寺本にも、浄土十二門第三で五戒を述べる順など、ごく稀にはあるが、他本とは異なり二巻本とのみ一致することがある。部分的にはあつても二巻本には、現存諸本の中で最も古いと思われ本文が伝えられており、また、第二種七巻本系諸本として同系に分類されるように、身延山久遠寺本と吉田本・瑞光寺本が一致する箇所もあることから考へれば、別系として扱う諸本も、二巻本系の母体とは同系統として位置付けられるべき比較的古いテキストに基づいて、ある時期に全巻通して甚だしく書き改められたものであることが窺われる。が、以後も他本との交渉は持たないままに書写が重ねられており、吉田本・瑞光寺本を、二巻本系の母体を辿る諸本とは一線を画して、別系と考へたのである。また、古鈔三本の内、本能寺本は、

求不得苦を説く冒頭からも吉田本・瑞光寺本と同系であると判断され、中でも瑞光寺本とは

ゆくとしをとゞめばこそはかたからめこむ老楽に達じとぞ思ふと吉田本に記される一首の、傍線を施した箇所をともに欠くなど、その関わりの深さを知ることができる。

勿論、複雑な本文異同を生じる宝物集諸本を、細部に亙る調査によつて分類するとすれば、巻数および形態の相違を基調とした小泉氏の提示される分類に極まるものと思われる。また、古鈔三本の内、光長寺本と最明寺本の位置は、それぞれの本文に即した考察が必要とならう。一卷本系についても、本稿では二卷本系の本文から考察を行つたために、二卷本系と関わる諸本の一つとして、その母体となつたテキストと同系統であるとしたが、宝物集諸本に占める一卷本系の位置には、なお慎重に考えるべき問題が含まれている。しかし、二卷本系の母体となつたテキストを探れば、その本文から溯るテキストに、現存諸本を生じた根幹を思わせることも事実である。あくまでも試論としてはあるが本稿を、宝物集諸本の系統を位置付けるための、いささかの問題提起としておきたい。

△注▽

① 宝物集には多種多様な諸本が存在し、諸本間の異同も甚だし

いが、小泉弘氏による

〔一〕 一卷本系八小泉弘氏「官内庁書院部蔵「宝物集」翻刻」、
「国学院女子短期大学紀要」6、昭和63年3月▽

〔二〕 二卷本系八静嘉堂文庫蔵、松井簡治博士旧蔵本▽

〔三〕 平仮名古活字三卷本系

〔四〕 平仮名整版三卷本系

〔五〕 片仮名古活字三卷本系八静嘉堂文庫蔵本、「身延文庫蔵
宝物集中卷付片仮名古活字三卷本」影印、和泉書院、昭和59年▽

〔六〕 第一種七卷本系

〔七〕 第二種七卷本系八光長寺本・本能寺本・最明寺本・身延

山久遠寺本は「古鈔本宝物集」影印、角川書店、昭和

48年 また、吉田本は「宝物集九冊本」、古典文庫蔵、

昭和44年▽

以上、七類の分類（「古鈔本宝物集研究篇」貴重古典籍叢刊8、
角川書店、昭和48年）があり、今日、宝物集研究のための基本と
される。（なお、△▽内には引用に用いたテキストをあげる）

② 二卷本系諸本の内、管見に入ったものは

。静嘉堂文庫蔵、宮島本

。静嘉堂文庫蔵、松井簡治博士旧蔵本（松井本と略称）

。国会図書館蔵上野分館本（上野本と略称）

。築瀬一雄博士蔵本（築瀬本と略称）

。北大附属図書館本（北大本と略称）

。屋代本古写本

。九州大学蔵萩野文庫本

。九州大学蔵細川文庫本

以上の八本である（各々の諸本の名称は、小泉氏が使用されているものに從った）。これら二巻本系諸本には微妙な本文異同が生じており、さらに

。松井本・築瀬本・屋代本古写本・細川文庫本

。上野本・北大本

。宮島本

。萩野文庫本

と分けることができる。しかし、上野本や北大本には、松井本系二巻本の本文に片活本による増補改変が試みられており、また、宮島本、萩野文庫本も、松井本系の本文を土台に省略あるいは改変が行われたとみられる。そのため、二巻本系宝物集は、松井本以下の四本に代表される本文をもって記されたものと考えられ、本稿において、二巻本の引用に際しては松井本を用いた所以にもなる。ただし、屋代本古写本は、現存する写本でなく、無錫会図書館神智文庫蔵の版本に朱書をもって校合されて

いる本文（「屋代本古写本已下為宝物集下巻」とある）である。

この校合により本文を辿る限りは、松井本等と同系本文とは言い難いが、どの程度迄正確に校合が行われたかも疑問であるため、とりあえず、松井本等と同系ということにした。

③ この同じ箇所を片活本では

刹利居士ノ懺悔ト云ハ正法ヲ以テ國ヲ治メ六齋日ニシテ不殺生戒ノ内ノ殺生ヲ止メ父母ニ孝養シカクノコトキノ事ヲ懺悔スル也昔羅漢ノ使ヒケル小沙弥七日ノ内ニ死スヘキ相アリ彼ノ沙弥道ヲ行ルニ蟻ノ子ノ一水ニ流レケルヲ助ケ生ケタリ其故ニ此沙弥カ命ノヒタル事アリキ

と記している。刹利居士の懺悔を三つあげた後、「正法治國」については一切ふれず、いきなり二番目の懺悔を脱くための例話を述べるわけであり、おそらくは片活本も、何らかの宝物集テキストに基づく省略本であることを窺わせる。

④ 「『宝物集』初期諸本の展開相」（『愛知県立大学文学部論集（國文学科編）』21、昭和45年12月）

⑤ 「『宝物集』と延慶本平家物語——身延山久遠寺本系祖本依据について——」（『人文論究』25の1、昭和50年6月）『平家物語成立過程考』八桜楓社、昭和61年✓に収録）また延慶本平家物語の本文は「延慶本平家物語」五（汲古書院、昭和58年）

から引用した。

⑥ 「統教訓鈔と宝物集——宝物集伝流考補遺——」(『馬淵和夫博士退官記念説話文学論集』、大修館書店、昭和56年)

⑦ 拙稿「宝物集諸本の系統——元禄本について——」(『国文学』65、平成元年1月)並びに「宝物集諸本の系統——二巻本系後出の二系統について——」(『国文学』66、平成元年12月)

⑧ 『白氏文集歌詩索引』下巻(同朋舎、平成元年)に影印の那波本から引用した。

⑨ 『雑念集』(阪本竜門文庫複製叢刊18、昭和62年)より引用した。

⑩ 「明賢作「誓願講式」をめぐって——報告並びに翻刻」(『日本仏教史学』15、昭和54年12月)

⑪ 「身延山本宝物集の研究」(『身延山本宝物集と研究』、未刊国文資料第4期1、昭和48年)

⑫ 「古鈔本宝物集研究Ⅴ」(貴重古典籍叢刊8、角川書店、昭和48年)

⑬ この一首は俊頼髓脳にみえる。ただし、宝物集(身延山久遠寺本・片活本)で俊頼髓脳は、この一首でなく、寂照の詠んだ和歌の典故としてあげられている。管見に入った俊頼髓脳の諸本に寂照の和歌はみえず、「おこなひをつとめて物のほしけれ

は西をそたのむくるゝかたとて」という一首に注記されていた出典が、いづれかの書写段階において寂照の和歌に付されたものと思われ、現存諸本のそれぞれに、本文的な乱れが認められる箇所となる。

⑭ 「統国文学古筆切入門」(和泉書院、平成元年)影印の「伝九条教家筆大四半切」。藤井氏解題では鎌倉後期も早い頃の書写とある。

⑮ 「身延文庫蔵宝物集零本について」(『身延文庫蔵宝物集中心 付片版名古巻活字三巻本』、和泉書院、昭和59年。「中世説話の文学史的環境」八和泉書院、昭和62年Vに収録)

⑯ 小泉氏注⑫前掲書。ただし、身延山久遠寺本では、ここで引用した一節も含めて、日意による省略箇所であり、また、省略を行った記述を要約して記した中にも、法興解はあげられていないため、二巻本等で欠けた傍線を施した箇所が吉田本同様に記されていたかについては、判断し難い。

⑰ 怖魔については、身延山久遠寺本も吉田本同様、記している。

⑱ 「大正新修大藏經」84から引用した。

⑲ 法華百座聞書抄に「或經文見候へハ、一人一日中八億四千念、念々中所作皆是三途業」(『校訂法華百座聞書抄』、武蔵野書院、昭和51年)とあるほか、身延山久遠寺本で記される傍

線⑨は、すでに成句化されていた文句である。ゆえに、身延山久遠寺本の場合も、安楽集の一節を引いた記述に単純な意訳を行って本文としたものではない。しかし、成句化されたこの文句に「安楽集引經云」と付すもの（聖覚作、四十八願釈）もある。

⑩ 『国文学古筆切入門』（和泉書院、昭和60年）影印により引用した。

⑪ 「『宝物集第二種七卷本系』考——他系統本文との関わり——」（『名古屋大学国語国文学』54、昭和59年7月）

⑫ 注⑩前掲書

⑬ 小泉氏も、身延山久遠寺本の本文を再評価されるときにも、御自身の分類を組み直されて

室町期の写しであり、かつ抜書本であるため全容をみることは出来ないが、(一)光長寺本・本館寺本・最明寺本等の古鈔本系(二)瑞光寺本・吉川本・吉田本の一群(三)第一種七卷本(四)片仮名古活字三卷本等と分化する以前の古態の名残を止めた伝本であるのかもしれない

と述べられている(注⑩前掲書)。

⑭ 身延山久遠寺本に比べると、身延本が二巻本と同じ記述を欠く度合いは高い(注⑩等)。勿論、身延本から二巻本が編集さ

れたという意味ではないが、二巻本系の本文を成すにあたって用いられたテキストが、身延山久遠寺本よりは身延本に近い分量で記されていたことが予想される。また、二巻本系諸本の内の一本、宮島本の第二冊が身延本での分巻の体裁と合致するとは指摘されている(黒田氏注⑩前掲論文)。宮島本の本文をみても、この本が古い形の二巻本を伝えていて、宮島本から他の二巻本系諸本が成ったとは考えられないために決め手ともならないが、あえて推測を加えるとすれば、二巻本系の本文を編集する際に用いられた宝物集が、身延本と同じく三巻に分巻されたテキストであった可能性も考えられなくはないだろう。